

解決のカギは、グアテマテイカを使ってきちんと指導できるよう、先生たちの意識を変えていくこと。そう考えた木村さんは2校以外の小学校の先生も集めて、研修会を開くことに。グアテマテイカに沿って、目で見て分かりやすい図表などを取り入れながら、分数や小数点などを教えるコツを伝えるためだ。

さらに、これまでは地域の先生同士で情報を共有する機会がな

年に国定教科書になっているが、赴任当初、2校ではほとんど使われていなかった。先生ごとに好きな教科書を使い、しかも教えることといえば、基礎的な足し算、引き算、掛け算、割り算ぐらいだった。

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。

「自分たち自身で授業を変えていく」

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。

「この国はカーニバルなどの行事が多く、授業をつぶして準備に充ててしまいます。教員の指導力も足りず、分数や小数点、図形などの分野は教えられていませんでした」と木村さんは話す。



[右] 現地の先生の授業を観察し、授業後に良かった点や改善点を話し合う木村さん [左] 100ごとのまとまりで数をとらえることを学ぶ子どもたち。現地の先生の授業中に理解度を確認する

計算だけが算数じゃない!

「ボルケ?」  
この単語が、教室で子どもたちに何度も投げ掛けられる。「なぜ?」という意味のスベイン語だ。「なぜ、この計算の答えは5になっただろう?」  
「なぜ、三角形の面積は長方形の面積を2で割るんだと思う?」  
グアテマラ西部、コミタンシージョの小学校での算数の時間。子どもたちが懸命に、自分で答えを導き出すプロセスを考えている。実はこれ、以前の授業とはまったく違う。その変化のきっかけをつくったのは、この地域の教育事務所に配属されている青年海外協力隊員、木村嘉秀さんだ。

教育学部出身で、進路に迷っていた時にゼミの教授が教えてくれたのが協力隊。教育システムがで

算数で考える力を育む

算数といえば、計算の授業しかない中米グアテマラ。青年海外協力隊員の木村嘉秀さんは、子どもたちに考える力が身に付くように、教員たちを巻き込んで授業の改善を進めている。

村さんは話す。  
子どもたちの反応も変わった。最初は、答えが言われるのをただ待っていたり黒板を写すのに必死だったが、今は自分で考えて問題を解く楽しさを知り、発言も増えてきた。

木村さんは、算数リーダーズと名付けた4人の教員を各学校に派遣し、現地の人々自身で指導力を伸ばせるように後押ししていく。「算数が好き!」

グアテマラ全土の子どもたちがそう言ってくれる日を、木村さんは夢見ている。

きあがっている日本と違って、まさにこれから教育の基盤が固められていく開発途上国で新しい視点を得たいと思った。すぐに「行ってみよう!」と決意した。

配属先は、日本という教育委員会。しかし、事務所員はなんと2人だけ。書類整理や教員の契約、学校視察が主な業務だが、この地域内に81もある小学校を管理しきれていなかった。

その中の2つの小学校を担当することになった木村さん。「赴任して半年はとにかく授業を見学し、先生たちとの信頼関係づくりを努めました。地元先生が一番子どもとの接し方を分かっていますし、現地の学校事情をよく理解した上でやるべきことを見つけたかったです」と振り返る。

木村さんが目を付けたのが、日本の協力で作成された算数の教科書「グアテマテイカ」だ。2008



日本人のように恥ずかしがり屋が多いというマヤ民族の血を引く子どもたち



教員対象の研修会では、木村さんが手作りの教材を使いながら小数点について分かりやすく解説

職員室がないため、授業が終わった教室で教員が集まり、授業を視察して気付いた点を話し合い、表にまとめる



グアテマラ  
from Guatemala